

確かな学力を育てる カリキュラム・マネジメント

編集:田中統治

Curriculum Management



カリキュラム・マネジメントで学校を変える!

「学力の保障」は、学校が担うべき最大の課題です。

21世紀に育てるべき「学力」とはなにか――。

その学力はいま、ほんとうに低下しているのか――。

「国語」や「算数」などの教科の枠の中だけで学力を捉えるのではなく、
総合を核とした「カリキュラム・マネジメント」という組織戦略をもって、
子どもたちの豊かな学力向上の進むべき方向を探ります。



総合学科高校における 総合学習の実践と「確かな学力」

服部 次郎 筑波大学附属坂戸高等学校長

Point!

総合学科は開設後10年が過ぎ、普通科、専門学科との間で、特色づけが曖昧になっている。そこで、「生徒に主体的に科目を選択させる」という総合学科の原理に立ち戻って、総合学科のアイデンティティを確立しなければならない。総合学科が「産業社会と人間」や「課題研究」などの総合学習で育成しようとしてきたものは、「現実的な問題解決能力」、すなわち「確かな学力」である。「キャリア教育」をベースとした総合学科のカリキュラム・マネジメントを提案する。

1. 総合学科高校におけるカリキュラム・マネジメントの必要性

総合学科高校は、1994年度に初年度開設7校に始まり、12年目の2005年度には、全都道府県に260校を超えるまでに普及した。

文部科学省が設置目標としている500校に向けて、今後も開設が続くものと思われる。総合学科は、多様な選択科目を開設し、単位制の柔軟な運用で、生徒の個性や進路に応じた主体的な学習を可能にし、生き生きと伸び伸びと学ぶ喜びを体験させることを目標として設置された新しい高校制度である。

これまでの総合学科高校の歩みは、「産業社会と人間」の科目開発や「課題研究」の成果発表など、今日で言う「総合学習」の先駆けとなったさまざまな新しい取り組みに挑戦し、とかく画一的・閉鎖的・固定的な悪弊に陥っていた感のある高校教育を改革する刺激剤の役割はよく果たした。

しかし、個性化・多様化政策の高校教育改革が進んで、普通科や専門学科でも選択制や単位制が導入され、新学習指導要領も各学校において「創意工夫を生かし特色ある教育活動を展開する」なかで、「個性を生かす教育

の充実」に努めることを求めるようになると、個性尊重教育の寵児ともはやされた総合学科も、やや影を薄くした感は否めない。

ここに来て、大学進学準備教育の普通科、スペシャリスト養成の専門学科と区別して、総合学科をいかに特色づけるか、すなわち総合学科のアイデンティティの確立が急務になっている。まさに本書編集の意図にあるように、それぞれの総合学科をいかに特色づけるかのカリキュラム・マネジメントが現今の総合学科高校における喫緊の課題になっている。

2. 総合学科の良さは、どこにあるか

普通科、専門学科と区別された総合学科の特色はなにか。

まず、いわゆる受験学力を鍛えて偏差値の高い大学に合格させることを目標とするならば、普通科の系統学習カリキュラムのほうが効率的である。

総合学科でも人文科学系列とか自然科学系列とか大学進学にターゲットを絞った系列設定はあるが、「生徒に主体的に科目を選択させる」という発想自体が「受験学力を鍛える」という現実的な目標に対しては効率的ではな

い。

一定期間に知識量を高めるには、系統的に配列された固定的カリキュラムの知識伝達型授業のほうが何倍も効率的である。

総合学科で普通科進学校に匹敵する進学実績を上げている総合学科があるとすれば、それは多分に「生徒に主体的に科目を選択させる」という総合学科の原理への制約のうえに成り立っているはずである。

同じことは、特定の専門的能力（技能）を鍛えることを目標としたスペシャリスト養成カリキュラムにもいえる。

高校3年間で資格・検定の合格者をたくさん出すことを目標としたら、専門学科の固定されたカリキュラムによる技能伝達型授業のほうが何倍も効率的であることも明らかである。昔から職人技というものは、親方の一方的な指導の下に鍛え上げられたものである。

よって、総合学科の目標は、「受験学力を鍛えて偏差値の高い大学に多数進学させる」とか「専門的能力を高めて資格・検定の合格者を多数出す」という、すでに普通科や専門学科が追求してきたところの「わかりやすい、目に見える数量的成果」を高めることに求めることはできない。

「生徒に主体的に科目を選択させる」ことを出発点に構成されるところの総合学科のシステムは、「教育効率」の観点で考えたら、これほど効率の悪いシステムはない。

「手間暇ばかりかかって、効率が悪い」のは総合学科に関わった教師は、百も承知である。「教師にとっての効率の良さ」は捨てて、「生徒が主体的に学習に取り組む良さ」にこそ総合学科の良さを見つけなければならない。

3. 総合学科の育成する「確かな学力」はなにか

それでは、受験学力や専門的能力を高めることが目標ではないとしたら、総合学科は生徒のどのような能力を高めることができるのか。

再び、「生徒に主体的に科目を選択させる」という総合学科の原理に立ち戻ってみよう。

生徒が自らで自らの学習計画をつくるということは、今、教育界で注目されているカリキュラム・マネジメントを生徒自体にやらせることである。

カリキュラム・マネジメントとは、教師集団自らが自らの学校に適したカリキュラムを開発することによって学校を改革し、学校を個性化していく組織戦略としての学校経営をいうが、総合学科では、生徒自体がカリキュラム・マネジメントを行っている。

すなわち、生徒自らが自らのあり方を見つめ、自らの人生を設計し、そのための科目選択を行い、履修計画をつくり、そのことによって自らの進路を自らで選択していく。

この「自らの生き方を見据えて、自らの進路を主体的に選択していく能力を育成すること」こそ総合学科の目標であり、総合学科を特色づけるものといえる。

とはいっても、「自らの生き方と進路を主体的に選択する能力を育成する」という目標は、達成度を数量的に示しにくく、依然として「抽象的でわかりにくい目標」であることは否めない。

しかし、ここに、この「抽象的でわかりにくい目標」を補完するに適切な資料がある。

社団法人日本経済団体連合会「2004年度・新卒者採用に関するアンケート調査集計結果」（2005年1月20日発表）によると、「採用選考にあたっての重視点はなにか」という問いに対する企業の採用担当者の回答（複数回答）の第1位は「コミュニケーション能力（75.0%）」、第2位は「チャレンジ精神（56.6%）」、第3位は「主体性（50.4%）」である。

まさに、総合学科が開設以来、教育目標や「産業社会と人間」の指導目標などに掲げてきた「現実的な生きる力、すなわち、受験学力では測れない現実的な問題解決能力」が企

業において求める人材の重視点になっている。

それに対して、重視度の低い項目は、「学校名(0.9%)」が23項目中最下位、「大学・所属ゼミ(3.2%)」は19位、「学業成績(6.6%)」は15位、「専門性(15.6%)」は12位である。これまでの偏差値学力で序列化されてきた高校が価値として掲げてきたことの重視度は低い。

もちろん、企業の採用担当者も、基礎学力を表す学業成績を軽視しているわけではないだろうが、それ以上に、最近の若者に欠けているのは、コミュニケーション能力(他人に働きかけて、仕事内容を説明したり、調整したり、分担したり、協力し合ったりする能力)、チャレンジ精神(困難に立ち向かって、ねばり強く努力を続ける姿勢)、主体性(自分自身のポリシーを持って、自分自身の責任で決断していく態度)などであると考えているのがよくわかる。

まさにこれらの能力や態度は、「産業社会と人間」や「課題研究」などの「総合学習」が目標としてきたものである。

そして、このような能力や態度こそ、総合学科において「確かな学力」とされてきたものである。

4. 総合学科のアイデンティティは「キャリア教育」にある

高等学校という学校段階を前後の学校の関係で考えてみる。

小・中学校の義務教育によって基礎的な学習基盤が形成されて高等学校に入学してくる。高等学校卒業後は、より高度な専門的職業能力を身に付けるために大学や専門学校に進学したり、直接職場に就職して、そこでの企業内研修によって職業能力を伸ばしていく。

それでは、高等学校では、なにをすべきか。「人間は、職業を通じて自己を実現し、同時に社会に貢献し、そして自らの幸福な人生を築いていく」ということをしっかりと自覚した人間を育成することである。

今日、強調されている「キャリア教育」のもっとも肝要な場は高等学校である。高等学校では、生涯を通じてのキャリアを形成していくためのしっかりとした勤労観・職業観を育成することこそもっとも大切な使命である。

そして、この「キャリア教育」に最も適した高等学校制度が「産業社会と人間」をベースにして展開する総合学科であるということを確認することが、総合学科のアイデンティティの基盤であるといえる。

「受験学力を鍛える」や「スペシャリストを育成する」から比べれば、「自らの生き方と進路を主体的に選択する能力を育成する」は中学生や保護者には抽象的でわかりにくいし、現実的アピール度は低いかもしれないが、しばらくはやむを得ない。

しかし、フリーターやニートが増え続けている現代において、何より大事な高校教育は、総合学科が「産業社会と人間」をベースとして行ってきた「キャリア教育」であり、現実の社会が求める能力は、総合学科が「課題研究」などの総合学習で培ってきた「現実的な問題解決能力」であるということは、やがては社会に認知されていく。総合学科は、まさにこれからの時代にマッチした高校制度なのである。

5. 本校総合学科は、カリキュラム・マネジメントの成果

最後に筆者の勤務校でのカリキュラム・マネジメントの事例を紹介しておこう。

本校では、総合学科初年度開設校として原則履修科目「産業社会と人間」の科目開発を行った。

自己を見つめ、産業と職業について学び、将来の生き方と進路を考え、高校での履修計画をつくることを目標として、職場体験や大学見学などの体験学習を多く取り入れ、かつての高校教育になかったまったく新しい参加体験型総合学習のカリキュラムを開発した。

この「産業社会と人間」をガイダンス科目

として始まり、必修科目から系列の選択科目へと展開され、「課題研究」を仕上げの科目として構成される総合学科のカリキュラムは、「生き生きと伸び伸びと学ぶ喜びを体験する総合学科」を実現した。

ところが数年運営していくうちに、1年次の「産業社会と人間」の学習が3年次の「課題研究」にスムーズにつながらないことがわかってきた。

そこで、本校では、原則履修科目「産業社会と人間」をさらに発展させて、原則履修教科「産業」の開発を構想した。

人は職業を通じて人生を実現していくとすれば、産業を学び職業を考えることは、あらゆる高校教育のベースとなる教養科目であると考えた。

平成12～14年度研究開発学校の指定を受けて、まず、1年次科目「産業理解」の開発を行った。

「我が国の産業の発展とそれがもたらした社会の変化についての考察」を目標とした指導計画・指導内容を開発した。「産業理解」は、現在、本校1年次の学校指定科目として「産業社会と人間」と組み合わせて実施されている。

さらに、第二段階として2年次科目「起業基礎」の開発を目指して平成15～17年度研究開発学校の指定を受けた。

これまでの職業教育は、「雇用労働者としての在り方」が中心であった。大量生産・大量消費の時代の雇用労働者は、マニュアルを的確に読みこなして運用する能力が求められた。

しかし、成熟社会では、大企業の雇用労働者の比率は減っていく。小企業や個人営業の時代である。

これからの職業人に求められるのは、仕事を創り出す能力、仕事を改善していく能力、いわゆる問題解決能力である。言い換えると起業家精神（アントレプレナーシップ）を持った職業人を育成すること、これが新しい職

業教育であり、総合学科のキャリア教育の目指すところである。

わが国では、起業家精神育成のカリキュラムは確立されていない。

そこで、これを研究開発することが本校の課題となった。

すなわち、本校は、「キャリア教育」をベースとする総合学科の確立のために、原則履修教科「産業」を基軸としたカリキュラム編成のためのマネジメントをしている真っ最中といえるのである。

〈参考文献〉

- (1) 筑波大学附属坂戸高等学校編『総合学科を創る——生き生きと伸び伸びと学ぶ喜びを』学事出版、2001年。
- (2) 服部次郎編『産業社会と人間——よりよき高校生活のために』学事出版、2003年。
- (3) 服部次郎編『産業社会と人間——実践の手引』学事出版、2004年。

*筑波大学附属坂戸高等学校公式ホームページ
<http://www.sakado-s.tsukuba.ac.jp/>